

愛知無償化裁判は、昨年9月2日に最高裁が原告側の上告を棄却したことにより終結を迎えた。無償化裁判という経験そして課題について、愛知弁護団に携わる弁護士たちの声を紹介する。

愛知無償化裁判は、昨年9月2日に最高裁が原告側の上告を棄却したことにより終結を迎えた。

#### 表明玉弁護士

地裁、高裁、最高裁と敗訴判決を突き付けられる過程で、この社会のなかで私たちが朝鮮人として生きていく、ただ民族性を大切にすることでなく、ウリハッキョを卒業しこれから子どもをウリハッキョに送る親として生きていく途に、横たわる困難の大きさを突き付けられた。けど一方で、私は弁護団や支援者の方々を通じて、これからも朝鮮学校とともに歩んでくれるかけがえのない仲間たちに出会えた。この運動を担った同胞たちもそうだろう。この闘いを走りぬいたからこそ出来た絆があり、そこには確固たる「希望」がある。

弁護士になり、4.24 阪神教育闘争などについて改めて勉強する機会があった。学生時代に習ったときは、輝かしい歴史のイメージがあったが歴史書で読むと、全国的には閉鎖に追い込まれ一時的に学校がなくなった。でも私を含め後の世代は、結果的に負けたということよりも、当時ものすごく大きな闘いをしたということを経験として引き継いでいる。そしてその記憶を引き継げるのは、その後の世代が闘いを続けてきたからだ。

負けたからと闘いを終えれば歴史にも負けが刻印される、でもその後、学校を再建し各種学校認可を勝ち取り今に至る。だからあの時の闘いに意義があったと振り返ることができる。高校無償化をはじめ昨今の在日朝鮮人をとりまく人権擁護運動もまた、「希望」を糧にそのような闘いを継続していかなければならない。

#### 内河恵一弁護士

朝鮮高校無償化問題の背景には、明治以降わが国の、特にアジアにおける歴史に正しく向き合う認識の著しい欠如とその歴史を正しく学ぶ「教育の不在」が存在する。同じ日本社会に住む子ども達への教育支援において、朝鮮高校生に対して驚くべき差別を平然と敢行する政治とそうした国の政策を違和感なく(?)受け入れていく日本社会の風潮は、「理性」の世界というより、明治以降深く植え付けられた皇民化教育にその根っこがあるように思われる。こうした事態を大きく転換させるためには、正しい歴史の学習と、アジア・世界との平和友好への熱い思い、何よりも国の正しい平和・人権政策が求められる。

「諦めない気持」と少なからぬ「時」が必要であるが、無償化闘争を進めてきた力を更に強化し、国に働きかけ、日本社会を動かし続け、いずれの日にか、現在の朝鮮学校が一つの学校として当たり前前に日本の社会の中に存在する状況を目指し、努力していきたい。

#### 仲松大樹弁護士

判決をどう乗り越えるのかが課題ともいえる。判決から明らかになったのは、裁判官の認識と私たちとは、根本的にずれがあり、マジョリティとしての日本人という立場が抜けていない。名古屋地裁に関してはひどい判決だが、「善意」で書かれたのでさらに根が深い。しかしこの裁判官の認識は日本社会の引き写しでもある。この根本的な価値観をどのように変容させるのか、その必要性を洗い出せたことが裁判の成果ではないだろうか。

他方で、日本人の目でみて「朝鮮学校は明るい学校だからいいよね」と単純に言い切ってしまうことを憂慮している。セーフティーゾーンがあることは、社会的偏見や差別のなかで子どもが押しつぶされずに育つ場として積極的に評価できるが、一方で弾圧や発達を阻害する動きに声をあげ、中を濃密にしながらもいい社会を私たちがつくっていかなくてはならない。

#### 矢崎暁子弁護士

訴訟の結果は全面敗訴だったが、それ以上に、8年間を通して運動の担い手が何倍にもなったのは、獲得したものがとても大きい。日本人のなかで私と同じようにこの問題を見過ごしてきたことに気づいた人たちもたくさんいる。私は自分の内なる差別意識、偏見に向き合うことで人間的に成長できた。そして理屈で「平等」を語るだけでは、根深く刻み込まれた偏見を克服できないことも学んだ。だからいまは、自分が持っていたような偏見を持つ人たちに、届けられる言葉を持っている。世論を大きく変えることは容易ではなく、人々が問題意識を持った状況ではじめて火が付く。けどそれは、火が付くまでの間に何度もその声が繰り返り起こったうえに成り立っている。だから、そこに至るまでの種火を身近なところからコツコツとおこし続けたい。

#### 中島万里弁護士

弁護団活動を通じて、自分と違うバックグラウンドを持つ人たちと密に接することで、かれかのじよらがどう考え、どう接してほしいと思っているかを少しずつ分かることができたし、私の無自覚な言動で相手が傷つけてしまったとき、密な関係だからこそ、間違いをなおすことができたと思う。加害・被害それぞれの当事者が一緒になって、被害者の代理人をするというある意味特殊な状況だったが、もしそこにヒントがあるとすれば、やはり腹を割る関係を築いてこそ、それが未来につながるのではないかと。被害が語られなければ問題が日の目をみないという側面は少なからずあるが、加害者はそれに甘んじてはいけいない。私たち加害者・マジョリティがそれをすくい取り、大きくし、牽引していかなくてはならない。

#### 青木有加弁護士

この訴訟に弁護士として携わる過程で、いつしか日本と朝鮮半島をめぐる戦後補償の問題など当事者として何かしなくてはと行動する自分がいた。それに自分がやっている活動が未来につながるのだと、その意義を、出会った人たちとのなかで感じることができた。

私は、朝鮮学校の無償化弁護団に参加しながら、在日朝鮮人の弁護士の方々から朝鮮に関するさまざまな話を聞いた。だから平和、人権、平等について考えるとき、自然とその人たちのことを考える。朝鮮学校と出会わなければこんな風には思わなかった。

過去に向き合うことは、悲惨で重いことだからなかなか社会で共有されない。けれど共有されたときに生まれる変化や効果は大きいからこそ、隣人であり友人の自分が、つなぐ役割を果たしていきたい。

(まとめ・韓賢珠)